

開催地名：愛媛県上島町	
開催日時	令和4年11月10日（木） 15：00 ～ 16：25
開催場所	弓削商船高等専門学校
語り部	大谷 慶一 （福島県いわき市）
参加者	学生会・寮生会役員、クラブ同好会リーダー、教職員 27名
開催経緯	現在、自主防災組織や学校防災教育の推進に取り組んでおり、本事業語り部によるご講演を取り組みの一環として取り入れることで、各活動や事業の質の向上が見込まれる。
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>私は福島県いわき市の薄磯地区に住む、東日本大震災の語り部だ。東日本大震災前の薄磯地区は、1キロ程度の海岸を有し、340世帯、780人が生活していたが、東日本大震災の津波により、一瞬にして地域は壊滅状態となり、住民116人が犠牲となった。また、福島県内では原発事故も発生し、強制避難を強いられた住民は10数万人にも及んだ。放射線の風評被害は今なお残る。本日は震災時の私の行動を基に、お話ししたいと思う。</p> <p>（２）東日本大震災発生</p> <p>2011年3月11日の14時46分に発生した地震はとてつもなく大きく、山が左右にゆっさゆっさ揺れているのが分かるほどだった。揺れが収まってテレビをつけたが映らなかったので、車のラジオで情報を集めた。ラジオによれば、近くの小名浜港には15時10分頃に3メートル以上の津波が到達するということがあったが、すでにその時刻となっているにもかかわらず、津波はまだ到達していなかった。津波は来ないと勝手に思い込み、200メートルほど離れた海岸まで行ってみると、海水が沖合の水平線まで引いており、海底が見える状態だった。それを見て大津波が来ることを確信し、自宅に引き返した。</p> <p>近所のお年寄り二人（うち一人は足が不自由）と自宅で待機していた妻に逃げるよう指示し、足の不自由な老婆を背負って一緒に裏山への石段を駆け上ったが、途中で津波が押し寄せた。この時、私は自分だけでも助かろうと行動した。背負っていた老婆を置き去りにし、もう一人の老婆の手を引き、飼い犬を抱いて登っていた妻に、老婆と犬を置いて急いで登るよう叫んだ。私と妻は助かったが、足の不自由な老婆は亡くなった、もう一人の老婆は津波に巻き込まれたが、奇跡的に助かった。</p> <p>私は、海を見に行き、海底を見てから、津波が押し寄せるまでの13～14分間の記憶がほとんどない。津波が押し寄せた後の記憶も鮮明ではない。助かるために無我夢中で石段を登ったこと、津波が押し寄せた後は巻き込まれた住民を救出するために、夢中で水の中で行動したことをはっきり覚えていないのが実情だ。</p> <p>裏山に駆け上った私と妻を含む住民49人は、山の上にある神社で一夜を明かし、翌朝救助に来てくれた消防の方々に連れられて内陸の避難所に向かった。避難後も、一週間以上はのどの渇きや空腹をほとんど感じる事がなかった。今思えば、心の余裕が全くなかったのだと思う。</p> <p>今では皆さんの前で普通にこの話ができるようになったが、震災後しばらくは、自分の行った行動が果たして正しいものだったのか、悩み苦しんだ。亡くなってしまった老婆の目を、私は</p>

今でも忘れられない。しかし、苦しくて悲しい自分の気持ちをさらけ出し、一人で抱え込まないようにすることで、ようやく精神的に落ち着いた。

(3) 震災を振り返って

住民のほとんどは、地震の後に津波が来ることはわかっていた。しかし、こんなにも大きな津波が来るとは想像していなかった。防潮堤を超えるような津波は来ないと勝手に判断し、高を括っていたのだ。住民の心の隙間に、災害が入り込んでしまった格好だ。災害が大きければ大きいほど、我々は原因を人に押し付ける傾向があるが、想定外の災害が発生する可能性を常に頭に入れておく必要がある。

災害が起きた時、逃げるタイミングはとても難しいが、自分で判断するしかない。逃げるスイッチは自分だけしか押せないのだ。自分の命より大切なものはないのだから、判断に躊躇は禁物だ。皆さんにお願いしたいことは、今日の私の話を、時々でいいから思い出していただきたいということだ。そして、今、自分の身の回りで命の危険が迫ったらどう行動するのかということ、時々でいいので考えほしい。想定外の災害は、ハザードマップのとおりにはいかない。死にたくないという本能の力を鍛えることで、命を守れる人になってほしい。



開催地より

震災の際のわずか数十分の間の緊迫した状況を再現していただき、とても引き込まれるお話しで、参加者は皆熱心に聴いていた。常にリスクについて考える癖をつけ、いつか来るであろう災害に対する備えを構築していきたい。また、当校としては、災害発生時に適切な判断ができるよう、防災教育や救命講習等の取組を強化するとともに、定期的に行われる住民避難訓練に積極的に参加したり、学校が自治体と連携して避難所運営訓練などを積極的に取り組んだりすることで、災害発生時の学校と地域の連携を見直し、学校に求められていることや、問題点などを模索していきたいと思う。